

復  
刻  
版

# JRAC 会報

第2号 昭和51年2月23日発行  
日本 兎 山 岳 会  
住 所 藤沢市亀井野 891  
発行人 北 代 康 敏  
編集委員  
白石嘉彦・石原一孝・林 和子



## 「新年を迎えて」

北代康敏

あけましておめでとうございます。

年末年始の山行は各自色々な型ですごされた事と思います。50年を振りかえって見ますと JRAC の発足とともに会員も増加し日本山岳協会の会員としての登録に始まり色々な行事のもとで基礎的な技術から会員の親睦等が行なわれて来ました。特に夏の合宿においては、土田君のアクシデントがありその後処理等においては会員の皆様方の御協力とチームワークにより土田君も 51 年 1 月 5 日に退院のはこびになりました。このアクシデントの反省をもとに今後の JRAC の体質改善等も検討され、それにもとずいて基本的な技術と、指導員クラスの教育等、本会カリキュラムのもとで進めて行き、皆様方の技術の向上と会員の親睦を計りながら進めて行きたいと思います。

## 昭和 50 年度山行行事一覧〔 50/4 月～51/1 月 〕

1 . 3/29	設立総会〔於丹沢登山 訓練所〕	11 . 9/14～15	日山協指導員検定第一 回〔於鷹取山〕参加:本 田,水谷,大森,橋元
2 . 5/10～11	第一回例会〔於丹沢登 山訓練所〕	12 . 10/12	臨時例会〔於青山アジ アセンター〕
3 . 6/25	藤沢市山岳協会に正式 加盟	13 . 10/25～26	岩登り訓練〔於湯ヶ 原・幕岩〕
4 . 5/30～6～1	春山合宿〔於谷川岳・ マチガ沢〕	14 . 11/1～3	秋山合宿〔於南八ヶ岳〕
5 . 6/14～15	岩登り訓練〔於湯河 原・幕岩〕	15 . 12/13～14	忘年山行・第四回例会 〔於乾徳山〕
6 . 7/12～13	第二回例会〔於丹沢登 山訓練所〕	16 . 1/14～18	冬山合宿第 1 回〔於南 八ヶ岳〕
7 . 8/9～13	夏山合宿〔於北アルプ ス穂高連峰〕	17 . 1/29	日山協指導員検定第二 回
8 . 8/31	神奈川岳連主催遭対訓 練〔於丹沢〕		〔後藤文明〕
9 . 9/3	第三回例会〔於東京八 重洲口〕		
10 . 9/6～7	14～15,20～21,27～ 28,10/4～5 ラビット収益事業富士 山きのご狩り		

## 第1回春山合宿訓練記録（谷川岳マチガ沢）

S . 50 年 5 月 30 日から 6 月 1 日迄総員 31 名の合宿記である。

5 月 29 日夜 BC 設営の為本田 1 名出発する。雪量は平年と同じ位であった。マチガ沢出合キャンプ地に BC 設営 翌 30 日夜間、後藤、白石、富山の 3 名入山、31 日朝本隊到着、全員でテントの設営後マチガ沢雪渓上で雪上訓練の為 9 時 BC 出発、S 状雪渓上部で訓練を始めた。13 時迄。13 時より右俣に全員で取りつく。しかし時間がない為コル迄 1 部の会員が登り、後は全員で BC に帰投。夕食後就寝 22 時。

6 月 1 日雲り

天気は下り坂、風も甘く感じる。AM8 時頃に全員で BC 発、9 時、今日のコースとメンバーを決定東南稜 8 名、西黒尾根 11 名、東尾根 11 名に別れ 9 時 10 分各隊出発、頂上での合流を合図に登行開始。東尾根隊の記録コースは別記の通りである。東南稜隊は雷雨の為途中で中止下山する。

西黒尾根隊は 9 時 10 分出発 11 名でマチガ沢より巖剛新道を登る。途中皆慣れていないせいか小休止が多い、クサリ場、一ノ沢等を登りトラバースし、下山の何パーティかとすれちがいながら懐雪小屋跡迄登行小休止をする。

10 時 40 分着西黒沢もマチガ沢もかすんでよく見えない。10 時 50 分出発。小さいクレバスがいくつも口を開いている。足が進まない会員も出て来た。雲行があやしい、全員急いで頂上に向う。トマの耳着 13 時、昼食にする、全員食事を始めた所に大つづの雨とカミナリ、肩の小屋に逃げ込む、小屋は満員で動くすき間もない位に混んでい

た。途中で他のパーティの事故の報告が入った。東南東尾根を心配しながら小屋の中で 1 時間半位待つ。外は雷がはげしい。中止したのかも知れないと思い 14 時 30 分小降りの雨の中下山開始、途中で雨が過ぎ双耳、東尾根を見て元の道を BC 迄帰投、17 時 BC 着、全員ぬれねずみ、BC に東南中止の隊員が待っていた。東尾根隊はまだ帰らず 2 名を連絡に出し帰投組は火をもやし食事を取る。

18 時 30 分東尾根隊と連絡員と合流。BC 撤収後全員で土合迄かけ足、最終に乗り上野に向う。ストの為列車の時間が不明に近かった。

途中より電車のある人は帰り、ない人は駅でビバーク、明日は眠いだろう町中のビバークでは。

本田 政人 記

後記 連絡不十分の感ありトランシーバを持参する事。

## 谷川岳マチガ沢～東尾根を登る（第1回春山合宿訓練）

JRAC 第一回春山合宿（5/30～6/1）は谷川岳マチガ沢において盛大に行われ会員の親睦と技術の向上、なによりも JRAC 会員としての自覚をおよいに高める場となった。この記念すべき山行の記録をなんとか残しておきたいと思っていたところ会報編集部の意向もあり合宿第3日目の東尾根コースをまとめてみた。

マチガ沢出合の BC 出発〔AM8.15〕曇りだが空はわりと明るい。滑りやすいゴーロ状の登山道を登りつめ雪渓に入る。昨日初めて雪渓に入った時とちがいキックステップも快調だ。

S 状雪渓〔AM9.15〕一息いれながら天候の具合をみて、今日のアタックのコースとメンバーを決める。東南稜、西黒尾根、東尾根の各コースに別れる。東南稜隊が先ず出発した。我々の隊は会長をリーダーに総勢11名、シンセン出合へまっすぐルートをとって進む。かなりガスが濃くなってきた。シンセン入口がガスにかすんで見える。雪はクラスト気味、確実なキックステップで登る。シンセン入口で小休止。もう汗がふきだしてきた。ブロック雪崩に充分注意しながら登る。途中数名のパーティーとすれちがう。

雪渓をぬけだして右俣の基部へとりつきテラスで大休止〔AM10.10〕すこしはやいがかかるく昼食をとっておく。残っていた水筒二本の水はアツと云うまになくなってしまった。先がおもいやられる。サア出発〔AM10.30〕ヤブの中の明りようを道をたどりゆるい傾斜の岩場にとりつく。むずかしいところはないか、浮石と落石に注意し

てブルージックで快調にピッチをかせぐ。

シンセンのコル到着。ホッと一息いれる。マチガ沢の雄大な眺めが素晴らしい。一ノ倉沢はガスで岩稜が見え隠れ、ときどき急峻な谷をみせてくれる。いつかこの谷にも...、と心に誓って出発〔AM12.00〕

左俣から上ってくる登山者に落石のプレゼントをしないよう細心の注意をしながら第一岩峰を巻く。これからは岩稜だ。ここまで来ると流石に高度感がある。左マチガ沢、右一ノ倉沢を眼下に見おろすと足の裏がゾクゾクしてくる。しかしここで弱音を吐くわけにはいかない。勇躍して前進だ。カブリ気味の岩を手足のバランス良く(?)登ったところで10名程のパーティーとすれちがう。腐ったザイルが一本垂れていたが危険なので会長が切捨てる。天井の様な岩かげで小休止。この間に雨がかなり強く降ってきた。全員雨具をつけるがヤッケで我慢する強者もいる(実は雨具を持っていた)をかった)いづらか小降りになった雨の中を出発。ところどころ草づきのある急斜面独標の下らしい。再び雨が強く降りつけ雷も鳴りだした。会長に命をあずけてここで雷をやりすごす。冷雨が身にしみて寒い。じっと我慢の三十分〔PM2.55～3.35〕

雷も遠くなり雨も心もち小降りになったところで行動再開。独標の急登で他の三人パーティーが悪戦苦闘、トップがピッケルを落してしまった。「オーイ、ピッケル拾え！」と会長声をかけたがとてもそんな余裕なかなかさそうだ。そこで会長みずから雪渓に降りたちピッケルを拾うとそのまゝ垂直にちかい草づきの壁を二本のピッケルを使って見事なバランスでテラスへ。手に汗握る一瞬。流石！我々はブルージックで独標頂

へ。頂は畳 6 枚並べた位の広さ。記念撮影。

サア、オキの耳までもう一息だ。小さな雪庇を渡り返し第二岩峰を右に巻くと最後の急登。草づきと浮石の大変な悪場…。しかし会長の指示どうりみんなおちついてこなしオキの耳の頂へ立った。瞬間視界がぱっとひらけいつの間にかはりつめていた雲が切れ遠くの山並にニジが…。「初登頂おめでとう！」会長とパーティー全員ガッチリと固い握手…。とうとうやったぞ。思わず「バンザイ！」と口をついて出てしまった〔PM4.20〕時間がたつのを忘れた一瞬だったがあまりゆっくりはしてられない。急いで下山だ。トマの耳まで鼻歌まじりで軽快にとばす。トマの耳〔PM5.00〕遙か巖剛新道を見下す独標で鈴木善三君と二人で伝令に出る。巖剛新道を一気に下り雪渓を駆け下りた（実は止りたくても止まらなかったのだ）。マチガ沢雪渓の出合で迎えに来た水谷さん達と逢い水谷さんの指示で再び下る。BC 到着〔PM6.30〕全員無事下山〔PM7.30〕陽はとっぴりと暮れていた。

終りにこの稿を書きながら自分の記憶力に些かうんざりしつつ、会長を始め数人の人々のお智恵を拝借しながらまとめてみた。足りないところは先輩の方々の御指導と今後の山行によってカバーしていただきたい。

(1975.7.25 記 青木 達三)

### 1975 年夏山合宿記録

1. 期日 8/9 (土) ~ 8/14 (木)
2. 北アルプス 穂高連峰岳川谷周辺
3. 分担  
CL 北代康敏  
SL 本田政人 水谷隆  
会計 大森武志  
記録 橋元武雄

装備 青木達三

鈴木由郎

食料 白石喜彦

榎本敬子

4. 参加者 上記のほか、市川齊、中野恵正、角幡悦考、角田央幸、斉藤修、鈴木茂樹、新井弘司、石川泉、奥田しのぶ、相川葉子、土田英子

5. 記録 8/9 (土) 21.00 新宿駅に集合、23.45 アルプス 8 号に乗車。比較的すいていて全員着席。後藤、上飯屋、林、牛山氏らの見送りをうける。

第 1 日 (8/10) 松本駅よカタクシー 4 台に分乗して上高地に向う。8.10 上高地発、12.15 岳沢幕営地 (奥明神沢出合) 着。昼食の後 BC 設営。

第 2 日 (8/11) 岳川谷周辺概念を把握するため、全員で天狗のコルから前穂まで縦走。6.40 BC 発。9.00 ~ 9.30 天狗のコル。11.15 ~ 11.40 ジャンダルム頂上。13.20 ~ 13.25 奥穂山頂 (記念撮影)。14.40 前穂登路分岐通過。16.30 BC 帰着。水谷、榎本両氏は食料補充のため馬の背から先行して上高地に向う。20.30 BC 帰着。一部天幕を移動。

第 3 日 (8/12) 本田、奥田両氏をテントキーパーとし、2 コース 3 パーティを編成した。第 1 のコースは扇沢をつめてジャンダルム ~ ロバの耳間のコルに到り、ジャンダルム基部のトラバースルートを経て飛騨尾根にとりつき、ジャンダルムに登る。第 2 コースは南稜を経て奥穂に到り、縦走路を通ってジャンダルム ~ ロバの耳間のコルに向い、第 1 のコースと同じくジャンダルム基部をまいて、途中から飛騨尾根第 1

テラス下のバットレスを登撃し、ジャンダ  
ルムに到る。第 1・第 2 コースはジャンダ  
ルム上部で合流し、天狗のコルより BC に  
向う。

第 1 パーティ (P1) L・北代, 白石, 鈴  
木(茂), 中野, 角幡, 角田, 斉藤, 石川,  
相川, 土田

第 2 パーティ (P2) L・水谷, 榎本

第 3 パーティ (P3) L・大森, 青木,  
市川, 鈴木(由), 橋元

P1, P2 は第 1 コース, P3 は第 2 コース  
をとる。

P1 5.30BC 発。6.20~6.40 雪渓中間(ア  
イゼン着装)。8.00~8.20 第 1 の滝下部(雪  
渓終了)。9.30 落石事故発生, 1 名負傷。9.45  
救助作業開始, のち P2(8.30BC 発)合流。  
14.40BC 着。18.30 上高地着。

第 1 の滝にフィックスザイルを張り, 順  
次登撃中, 中野氏が浮石に触れ落石, これ  
が他にもいくつかの落石を誘発した。その  
うちのひとつが下部で待機中の土田氏のヘル  
メットにあたり, すべって左肩を打ち,  
意識不明となった。他にも落石に打たれた  
ものがいたが, 幸いにして事なきを得た。  
滝の上部にいた北代氏が事故発生を知って  
下降し, ただちに救助活動が開始された。  
途中から合流した P2 の水谷氏の指揮下に  
下降ルートの工作がおこなわれたが, 初心  
者がほとんどであったため作業は困難をき  
わめた。北代氏が負傷者を背負い, 扇沢出  
合まで下る。BC で応急処置を施し岳沢ヒッ  
ユテ等への連絡をすませて作業を再開。BC  
に水谷氏ほか数名を残し, 当日入山した荒  
井氏もまじえて上高地に下った。

P2 5.30BC 発。5.55~6.00 ルンゼ取り  
つき, 7.50~8.05 トリコニー第 1 岩峰下部

の岩壁。8.35 第 1 岩峰通過。8.55~9.05 ト  
リコニー第 3 岩峰基部。10.40~11.00 吊尾  
根縦走路。11.35T1 フランケ取りつき点。  
15.40~16.00 飛騨尾根第 1 テラス。  
17.30BC 帰着。

南稜を登攀中鈴木(由)氏は体調を乱し,  
縦走路に出てから重太郎新道を下った  
(16.30BC 帰着)。他の 4 名は予定どおり  
T1 フランケ取りつきに向う。T1 フランケは  
すでに 1 パーティが取りついていたため,  
休憩しながら様子を見た。ここで P1・P2  
合流隊との連絡のため青木氏はジャンダ  
ルムに戻る。他の 3 名は P1 が到着しないのを  
不安に思いながらも登攀を開始し, ジャン  
ダルム上部からの青木氏の声援を受けなが  
ら無事完登。飛騨尾根第 1 テラスにて青木  
氏と再会し, 合流隊 (P1) と会えないまま  
BC に戻り事故発生を知った。

落石をうけた土田氏は, 上高地から北代,  
本田, 石川 3 氏の付添いで松本に下り松本  
丸の内病院に入院した。上高地に下った救  
助パーティは 21.30 頃 BC に帰着した。

第 4 日 (8/13) 昨日の事故のため滝沢大  
滝の登撃は中止した。昨日の P1, P2 から希  
望者をつのり, 奥穂南稜トリコニー第 1 岩  
峰まで往復するパーティを編成した。水谷  
氏は昨日の事故で残してきたザイルの回収  
にあたり, 鈴木(由), 角幡, 奥田の 3 名は  
扇沢・滝沢出合の雪渓にて雪上訓練。相川,  
中野の 2 氏はテントキーパーの役にあたっ  
た。

トリコニー往復パーティ L・大森, SL  
橋元・青木, 鈴木(茂), 白石, 斉藤, 角田,  
荒井 9.50BC 発。10.25~10.30 ルンゼ取  
りつき。11.20 トリコニー第 1 岩峰下部の  
岩壁。13.05~13.30 トリコニー第 1 岩峰。

14.30～14.40 トリコニー第1岩峰下部の岩壁。16.00BC 帰着。途中青木氏は鼻血を出し、体調悪くひき帰した。第1岩峰下部の岩壁で橋元、白石、荒井の3氏が残留し残りのものが第1岩峰に向った。残留組は岩壁に下降用のザイルを固定する。下山には上記を含めて2回ほどアプザイレンを行った。ルンゼ取りつき点で青木氏と合流した。扇沢出合には、ザイルを回収して戻った水谷氏、松本から帰った本田氏その他全員がそろっていて、土田氏が強度の脳震とうと打撲傷だけでしたことを知り、ほっとする。市川、榎本両氏は朝方下山。夜は全員の個人装備の食料を供出して、合宿最後の晩を楽しくすごした。宴会もたけなわのころ下諏訪の牛山氏が友人1名とともに入山してきた。なお、この日後藤氏も松本の病院に来ているとのことであった。

第5日(8/14) 合宿は終了。本山下山である。テントは撤収しゴミを集め、燃えるものは燃やし、カン類は岳沢ヒュッテへ、ビン類は上高地へおろす。9.10BC 発。10.45 上高地着。白樺荘の前で1時間ほど談笑しながら軽い食事をとる。12.20 タクシーにて上高地発。13.50 松本着。連絡の手違いから北代氏らと会うことはできなかったが、水谷、青木、鈴木(由)、相川の4名は残って土田氏を見舞った。他は14.58 発アルプス52号に乗車して帰京した。

(橋元 武雄)

### 「土田さん退院」

8月穂高合宿の際、落石による事故で松本丸の内病院から、9月1日より大森いすず病院に移っていた土田英子さんは、1月5日退院しました。

ケガのほうは、松本の病院で診断されたより長引き、5ヶ月間の入院生活を送りましたが元気に退院する事ができました。当分、通院を続けなければいけません、又私達と一緒に山行できる日も近いことと思います。(林 和子)

追記 尚、皆さんからいただいたカンパは64,500円になりました。ご協力ありがとうございました。

### - 「きのこ狩りの集い」を開催 -

「秋の富士山で御来光ときのこ狩りを楽しむつどい」と銘うってラビットの収益事業を会員諸氏の協力のもとに9月・10月の土曜・日曜・祭日をあてて前後5回に亘り開催した。宿泊は富士吉田五合目の佐藤小屋を利用したが、当小屋主佐藤のオヤジの助力と、富士のヌシとも云うべき本田幹事の指導よろしきを得て、きのこのとり方見分け方、料理の仕方と何とかこなし、お客様にもまずまずの評判であった。

参加者募集は会員の「くちコミ」に依ったが、会員の参加も含め140名程になり、収益も112,455円であった。このうちから土田英子会員の松本市での入院中の費用とザイル2本の購入に支出しているが、有益に使ってゆきたい。

紙上を借り会員諸氏の協力に厚くお礼申し上げますとともに、本年春にも「山菜を楽しむつどい」を計画するので会員総力を挙げて成功する様御助力をお願いする次第である。(後藤 文明)

### 秋山合宿記録

10月31日(金)雨

PM8時前日來の雨の中集合地点、新宿駅

構内「アルプス広場」へ三々五々集合。連休前には新宿駅の混雑はやゝまし。本田，上飯屋氏それに小生の3人，装備の一部と連絡のため来る。PM10時乗車。さいわい全員着席できる。11:55 長野行普通列車発車。

11月1日(土)曇のち晴

茅野駅 AM5:45 タクシーにて美濃戸口 6:55，発 7:35 美濃戸山荘 8:40，9:00 小休止 9:30，9:45 柳川東沢入口にて橋元氏事故 10:02。赤岳鉱泉 11:15。BC 設営。夕食 P 配 5:00。

茅野駅前へ牛山氏ジープにて出迎え。大型荷物は同氏のジープに託し，それぞれタクシーに分乗美濃戸口へ向う。朝食後美濃戸口 8:35 に出発。美濃戸山荘で大休止，共同装備を分担 8:35 山荘を発ち東沢の道をとる。沢へ下ると前日来の降雨が凍結し滑りやすい。沢の入口，丸木橋を渡っている途中で橋元氏が滑落，前額部を切る。

この事故のため大森氏がつき添い，美濃戸山荘より牛山氏の運転で諏訪市の病院で治療する。傷は2針程度で，橋元氏は単独で帰宅する。

沢の道は岩が凍り歩きにくい。昼前に赤岳鉱泉へ到着。八ヶ岳主峰群は中腹ぐらいまで雪におおわれている。

BC 設営，中食後のんびりと過す。5時夕食。カレーライスと途中で仕入れた野沢菜はすこぶる好評で翌日分まで手をつけてしまった。

夕食後，食当の青木，鈴木(由)氏は不足食糧の買出しに美濃戸山荘まで下ることとなった。美濃戸山荘の少し下で後発の後藤氏他6名と出会う。(PM8:00)東沢の道が凍結で危険なため峠越えのコースをとり

PM12:00 BC 到着。

11月2日(日)快晴 AM6:00 起床。6:30 朝食。本田，磯村両氏が夜半茅野駅へ着き，BC へ到着する。

本日は全員を3パーティに分けて行動のこととする。

・岩パーティ ジョウゴ沢から大同心南壁。CL 根本，SL 本田，白川。

・縦走 A パーティ 赤岳，横岳，硫黄岳の縦走。CL 森田。

・縦走 B パーティ 硫黄，横岳往復。CL 大森，SL 富山。

7:35 岩パーティ発。7:51 縦走 A 発。8:10 縦走 B 発。

鈴木(茂)氏は腰痛のためテントに残り，のち単独下山。

朝のうちは雲一つない快適な天気であったが10時半頃，諏訪側よりガスがかかり始め，やがて山腹より上はすっかりガスに覆われる。

岩パーティはジョウゴ沢を遡行，アイゼンをつけフリーで登攀を続けるが，技術の点とガスがかかってきたため大同心は断念，硫黄へ抜ける。途中樹林を使ってザイルの練習を行なう。硫黄岳で縦走 B を待つが現われず，やがて縦走 A が横岳を経てやって来るのに会い，共に BC へ下る。

縦走 B は 10:05 硫黄の頂上に立ち 横岳・へ向う途中，石室で中食後 12:05 横岳山頂着。予定ではここから元へ戻るなのであるが，頂上で会った赤岳石室のヒゲのオヤジの情報により地蔵尾根を行者小屋へ下ることとする。硫黄岳から縦走路の積雪は約 30 センチ。クラストしていずアイゼンなしで歩行出来る。12:43 横岳山頂を離れた縦走路で A パーティと出会う。地蔵尾根の急な下りで



一個所アブザイレンで下る。Bパーティは本夕の食当のため一部が先行してBCへ急ぐことになり15:45BCへ帰着。

16:40。岩，Aパーティとも全員無事BCへ帰着。

17:30 夕食。引き続きコンパ。

11月3日(月)快晴。

本日は全員ジョウゴ沢で岩の練習とする。そのため先発隊は6:20BC発。本隊は7:00発。7:30FIに着く。すでに先発隊がザイルを掛けている。初心者組は根本，白川氏が指導。他は各自めいめいでフリークライミングとアブザイレンの練習を行なう。

11:45。練習を終了しBCへ帰着。昼食後BC撤去。

13:00BC発，美濃戸山荘へ向け東沢を下る。美濃戸山荘より荷物は牛山氏のジープで運搬してもらい美濃戸口まで軽装で下る(15:00)，美濃戸口よりバス。茅野駅前解散(16:50)

(富山 八十八)

### 冬山合宿訓練(第1回)記録

- 1.日 時 昭和51年1月14日~18日
- 2.場 所 八ヶ岳
- 3.参加者 CL 水谷隆 SL 後藤文明・青木達三・鈴木善三・鈴木茂樹  
記録 白石喜彦  
会計 藤森健次  
浅見孝男。芝田和夫・丸山恵司・薦田泉・林和子・相川葉子・高山操枝
- 4.1月14日(水) 新宿発23:55 長野行夜行で普通列車に後藤氏をのぞく12名が乗車。見送りには本田・大森・角幡氏らがかけつけてくれた。

1月15日(木)快晴。茅野発美濃戸口行のバスに，6:30までに全員乗車。美濃戸口で共同装備を各人にわりふって8:00出発。途中10~15分の休憩を3回ほどとって10:07美濃戸山荘着。全員が肉うどんを食べた。11:00山荘発。柳沢南沢のコースをとる。途中，相川氏不調のため荷を軽くした。12:39~13:07，日あたりのよい場所で昼食休憩。この時に，本日アルプス1号で発った後藤氏が追いついた。皆の荷が重いため30分に1本の割合で休憩をとり，ファイト，ファイトのかけ声をこだまさせながらBC(行者小屋の下)着15:18。

1月16日(金)快晴。8:00準備体操。8:30よりBCの下でラッセル訓練をはじめ。雪はヒザから，深いところでは胸までであった。午後より反対側の斜面に移動して滑落停止及びビレーの訓練をした。滑落そのものを楽しんだ形跡がある。16:00BC帰着。この夜，芝田・藤森・林・薦田・丸山・白石の6名がBC近辺でビバーク訓練をした。

1月17日(土)快晴。8:55BC発。文三郎新道を登る。10:25~10:35，赤岳への分岐。11:10~11:35，赤岳と中島のコル。食事休憩。薦田氏らの連発するジョークに笑声の絶え間がなかった。12:45~13:00阿弥陀岳頂上。頂上は風が強かったが展望はよかった。全員で記念撮影をして下山にかかる。急降下に備えてザイル2本用意してあったが使用するほどのこともなく，全員無事に中岳のコルまで下った。13:32~13:40中岳のコル。中岳沢をグリセードで快適に下り14:12行者小屋着。ここでテルモスに水を補給してBC帰着14:30。薦田・丸山2氏は美濃戸山荘までコンパ用飲料を買出しに下った(17:07BC帰着)。

1月18日(日)雪のち曇り。BCを撤収して10:30下山にかかる。11:13休憩。ここでゼルプストをつけて氷瀑に向かう。12:15氷瀑に取りつく。たまたま同時期に入山していた根本氏の指導も得て、氷を楽しんだ。15:00さきの休憩地を出発。15:40~16:10美濃戸山荘。ここでアイゼンをはずし、あとは一気にかつ慎重に下山した。美濃戸口着16:55。17:10にバス発車。全員18:39茅野発アルプス6号で帰京した。楽しく充実した合宿だった。なお、17日夜のミーティングで参加者がそれぞれ今回合宿についての感想を述べた。それらをまとめると個人装備・食料計画および体力の三点にしばられる。すなわち個人装備にあれも、これもと持ちすぎ、食料計画も欲ばりすぎている。体力がまだついていないという反省も二三の者から出されたのである。BCまでの登りが非常に苦痛であったのはこれら三点が集積された結果であると考えられる。個人装備と体力については個人の問題であるが、食料計画については水谷氏より当J.R.A.C.のレーションをつくるのが提案された。

(白石 喜彦)

## 1975年度会計報告

(昭和50年12月末日現在)

### 収入の部

入会金及び会費 2,200 × 53 = 116,600

### 支出の部

事務費・通信費 11,690  
 会報第1号印刷代 5,200  
 ときわ木用写真 120  
 ポリバケツ 500  
 トランシーバー用バッテリー 720  
 土田氏に関する費用 25,000

阿南氏挙式・祝電	300
会場費	4,400
装備(コッフェル等)	23,920
岳沢事故謝礼	3,120
岳沢合宿不足金	<u>5,380</u>
計	80,350
75年12月31日現在残金	36,250円

(藤森 建次)

## アンケート集計報告

会の今後の運営を考えるに当って、会員の意見をきくことと、会員の実態調査を目的に、全員にアンケートをとることが幹事会で決定され11月14日、会の中間報告とあわせて用紙を全員に郵送した。

締切日が公労協のストと重なったりして混乱したが、23通の回答がよせられたので以下に報告する。

回答数 23

1. 保険加入      なし 7      加入済 16
2. 預 血          なし 12      あり 10
3. 山行開催に対する希望
  - (1)開催回数    (イ)1ヶ月に1回      14  
 (ロ)2ヶ月に1回      8
  - (2)開催希望日    (イ)土日 20    (ロ)連休 11  
 (ハ)日曜のみ 2  
 (ニ)その他 1(夏休み,5月の連休等)
  - (3)開催目的    (イ)基礎的技術知識を一通り修得したい 16  
 (ロ)特にやりたいものを集中的に 3  
 (岩,氷,雪,沢)  
 (ハ)その他の希望 1  
 (縦走も加える)
4. 会に対する要望等

- ・少い日数でも内容のある充実した山行を
- ・山行は楽しさよりも厳しさと安全性の追求を
- ・全員が体力増強に努めること。また生活技術も修得したい。
- ・山行に際しては初めから終わりまで充実した指導がほしい。
- ・山行前のミーティングを徹底し、山行への理解を充分準備してからにしたい。
- ・会の目的をはっきりとしてほしい。
- ・生活技術の修得、応用を含めた縦走も計画してほしい。
- ・山行に際しては役割を厳密にきめ、リーダーはリーダーシップを発揮してほしい。
- ・参加人員が多過ぎるので10人程度のグループ山行も希望する。
- ・コース別プランで参加人員をしばり、合同山行は年数回とする。

<まとめ>

1. 保険加入者は多いが、未加入者もかなりあり、また会として加入することの希望もあるので、例えばJRACとして団体保険に加入する方法等今後も引続き研究する。
2. 預血を行なっている人はまだ少ないので、今後とも会員は自主的に預血を行なうよう心掛けねがいたい。
3. 開催に当っては1ヶ月に1回程度 土日、連休利用が圧倒的に多い。
4. 開催目的については基礎的技術の知識を修得したい希望が多く、また内容的に幅を拡げて行く必要もある。
5. 以上アンケートの結果を参考に、12月9日開催の幹事会で51年行山行計画につき

討議し忘年山行の際発表した。一部重複するかも知れないが関連事項のみ抜き出すと、(議事録より)

- 1) アンケートによれば年間を通じた基礎修得のカリキュラムが必要である。
- 2) 地方山岳会としては、高度な技術の修得、指導者の養成も必要になってくる。
- 3) そこで山行計画を2本建とする。  
     全員対象の山行。基礎の修得を主目的とする。  
     グループ山行。小人数で専門的、高度技術の修得。
- 4) 会員の山行態度について改善する必要がある。  
     「登訓」の延長で傍観的、生徒的な面があるが、これを自主的、協同参加的態度に改める必要がある。
- 5) 今冬の計画は雪に慣れることと冬山入門を主目的とし、八ヶ岳を中心とし、1~3月の毎月実施する。  
     ボッカ 歩行訓練 テントを主とした生活技術。
- 6) 山行参加状況をチェックし、順次グレードアップのコースとする。
- 7) 会員中よりピックアップし高度な技術修得と指導員養成をはかる。
- 8) グループ山行の参加は指名制の場合もある。
- 9) 現状指導員の負担が過大で、日常生活面で犠牲も強いられているので、指導員不足の解決策を考えねばならない。

( 富山 八十八 )

## 編集後記

○JRAC 会報第2号をお届けします。昨年

5月に創刊号を発刊してから9か月ほども経ってしまい、会報委員の怠慢をまずおわびしてかきます。

中心となったのは合宿記録で、参加した会員には楽しかった山行を思い出すよすがとなるでしょう。しかしながら読んで楽しめる会報にはまだ遠いように思います。会員相互の理解・親睦を深めるためにも原稿を募ります。会員全員の総力で会報をつくっていきましょう。

会が発足してからの10か月をふりかえると充実した足跡を残せたように思います。今後も会としてのいっそうの充実をめざしたいというのが全体の決意であることを、各自が確認しておきたいと思います。第1回冬山合宿(ハヶ岳)のミーティングの際にも話しあわれましたが、装備の面でも肉体的、精神的にも岳人とし鋭く痩せる方向をめざしていきたいと思います。そのことが会の山行の充実に直結するはずですから。

(白石)